

2018年度 カンボジア 現地活動報告書

2019年2月

プノンペン州、シェムリアップ州、コンポントム州



3年生 安倍和佳奈、小川龍星、小田嶋優花、谷内うらら

2年生 岩上颯太、川畑美由紀、小泉栞里、佐藤透、高橋くるみ、田村遥花、丸山海結、渡部陸

1年生 阿部明香里、猪野遥人、入江翔大、後藤亮一、佐藤楓、鈴木駿、須藤大介、高木智稀、山口玖美伽

目次

目次

PART1 はじめに

団体紹介

これまでの活動

お世話になった方々

カンボジア基礎情報

PART 2 トラム・クラーク小学校

PART 3 ベンロヴィア・レー小学校

PART 4 トム・オー小学校

PART 5 シェムリアップ、プノンペン

PART 6 メンバーの感想

谷内うらら

安倍和佳奈

小川龍星

小田嶋優花

岩上颯太

川畑美由紀

佐藤透

高橋くるみ

田村遥花

丸山海結

渡部陸

阿部明香里

猪野遥人

入江翔大

後藤亮一

佐藤楓

鈴木駿

高木智稀

山口玖美伽

PART 6 おわりに

今後の展望

PART 1 はじめに

団体紹介

私たちは、麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力（IEC）専攻の3年生4名、2年生8名、1年生8名、グローバル人材育成専攻1年生1名、合計21名で活動している国際協力団体 Plas+ です。「プラス」と読んでください。

Plas+とは“Present love to all students”の略で、“すべての子どもたちに愛を”をモットーに活動を行っています。映画『僕たちは世界を変えることができない』に感化され、「私たちもカンボジアで何かしたい！¹」と考え、2014年4月26日に団体を発足しました。

現在は、一般財団法人麗澤海外開発協会（RODA）²が、小学校建設の際に資金援助したトム・オー小学校を拠点とし、今年からはベン・ロヴィア・レー小学校、トラム・クラール小学校とも繋がり再構築を目指し、3校で様々な活動を展開しています。

また二年前から新たにフィリピンを拠点地に加え、カンボジア、フィリピン、日本の3か国で国際交流・国際協力を行っています。

¹ 『僕たちは世界を変えることが出来ない but we wanna build a school in Cambodia』
葉田甲太さんの体験記が原作となった、向井理さん主演のノンフィクション映画。ひょんなことをきっかけに、医大生4人がカンボジアの子どもたちのために学校を建設しようと奮闘する青春ストーリー。Plas+では、新メンバーが入ってくると、まずこの映画を一緒に観ることにしている。

² 一般財団法人麗澤海外開発協会（RODA）
発展途上国において文化、経済の発展に協力するため国際協力活動を通じて、世界の平和、人類の安心と幸福増進に寄与することを目的とし、主にネパール、タイ、ラオス、カンボジアにおいて援助活動を行っている。

Plas+のこれまで

結成 1 年目は、カンボジアや国際協力について学習を始め、私たちにできることを探しに初めて現地を訪れました。しかし、カンボジアの実情と国際協力の難しさを痛感し、現実に打ちのめされてしまいました。

それでも私たちにできることを探すために、2 年目からは自主企画ゼミナール³として Plas+ の活動を申請し、大学にも認知される団体となりました。そして担当教員である麗澤大学外国語学部講師（当時）の内尾太一先生と共に、インタビューリレーをという活動を始めました。

インタビューリレーとは、カンボジアに詳しい専門家やゆかりある方を訪れ、これまでのご経験についてお話を聴かせて頂き、その方に次のインタビュー協力者の紹介をお願いする、というものです。

インタビュー協力者のカンボジアに関するエピソードやカンボジアでの国際協力についてお聴きするとともに、これまで 20 名近くの専門家に「学生の私たちにできることは何か」という共通質問をして、様々な意見やアドバイスを頂きました。それらのアドバイスを基に私たちが考案したものが出前授業⁴でした。

これまでカンボジアには、団体として公式に 8 度訪れており、その度に出前授業を行い、国内でもカンボジアの良さを伝える出前授業を展開しています。

³ 自主企画ゼミナール

麗澤大学が開講している授業形態の 1 つで、既存の枠組みにとらわれず、より多く学びたいという意欲的な学生、並びに主体的に学習計画・学習内容を提案したい学生のための科目。授業としての扱いとなるため、単位認定もされる。

⁴ 出前授業

メンバーが担当教科を持ち、先生となって授業を展開するというもの。これまでカンボジアでは小学校 3 校で 6 教科（科学、言語、体育、交通安全、夢、日本文化）の出前授業を行った。国内では南三陸町の塾や都内の高校でカンボジアの良さを広める出前授業を行った。

また、一昨年から活動拠点をフィリピンにも拡大し、課題解決型のプロジェクト形成を開始しました。一昨年の夏季休暇にメンバーの内 3 名がセブ島に訪れ、昨年は団体として初の公式渡航をし、今年度からプロジェクト形成に取り掛かる予定です。

お世話になった方々

○日本

- ・木下廣太郎さん：トム・オー小学校建設〈一般財団法人麗澤海外開発協会 RODA 常務理事〉
- ・小西直之さん：トム・オー小学校建設〈一般財団法人麗澤海外開発協会 RODA 常務理事〉
- ・俣野幸昭さん：トム・オー小学校建設〈一般財団法人麗澤海外開発協会 RODA 監事〉
- ・林真市さん：航空券手配〈株式会社林旅製作所⁵⁾〉（以下、林さん）
- ・太田祥歌さん：クラウドファンディング伝授〈認定 NPO 法人日本ハビタット協会⁶⁾〉

○カンボジア

- ・ソパートさん、アチャーさん、ヴィスナーさん、チャーチさん：ガイド・通訳
- ・ソクさん、クオンさん、シムさん、：ドライバー

⁵ 株式会社林製作所

航空券の手配やスタディーツアーの計画を手掛けている会社で、お客様が旅行をし、その国をサポートする「旅のフェアトレード」を行っている。航空券を申し込むと一人につき 500 円を、また、スタディーツアーの申し込みをすると売り上げの一部を旅した国に寄付している。

⁶ 認定 NPO 法人日本ハビタット協会

人間居住問題の重要性に関する広報活動、居住分野における国際協力活動、人間居住環境の改善活動を主に行っている NPO 団体。世界中の人々がより良い暮らしができ、安心して安全に暮らすことができるようなまちづくりの推進に寄与することを目的としている。

- ・ヌン・ジャンさん：トム・オー村 村長（以下、村長）
- ・アムヒアンさん：トム・オー村 副村長（以下、副村長）
- ・シースンさん：トム・リン市 市長（以下、市長）
- ・ホンさん：トム・リン市 副市長（以下、副市長）
- ・リウティナさん：トム・オー小学校 校長先生
- ・ハイロンワイさん、レアヴティナさん、ティーボンチャンさん、シェンサンポーさん、クオンティアティー、フォウメイングペツさん：トム・オー小学校 教員
- ・ネアンネンさん、パアンダリタさん、スアンボパーさん、ネアンソペアさん、ウウンチャンニーさん、ヘイアングセエンハアンさん：トラム・クラール小学校 教員
- ・チェアツソケアンさん、ウツムソヴァンニーさん、ケットソフィアさん：ベン・ロヴィア・レー小学校 教員
- ・酒井恵理子さん：くっくま孤児院訪問の受け入れ〈NPO 法人グローブジャングル⁷〉

その他にも今回の渡航にあたり、多くの方々に協力いただきました。

この場をお借りしてお礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

⁷ NPO 法人グローブジャングル

カンボジアで子どもたちの未来を創るサポートをしている団体。主に、孤児院支援や学校建設、貧困家族への就労支援を行っている。

カンボジア基礎情報

【カンボジア王国の基本情報】

首都：プノンペン

人口：1567.7 万人

面積：18.1 万km²

一人当たりの国内総所得：950 米ドル

公用語：カンボジア語（クメール語）

主要産業：農業・縫製業・建設業・観光業



【近代以降の略史】

1863 年 フランスの保護国となる。

- 1887年 フランス領インドシナに編入される。
- 1945年 カンボジア王国として独立を宣言する。
- 1947年 フランス連合内で限定独立を遂げる。
- 1953年 完全独立を獲得する。
- 1970年 親米のロン＝ノル将軍が実権を掌握する。共和制へ移行したが、内戦が始まる。
- 1975年 クメール＝ルージュがプノンペンを陥落させ、実権を掌握し、民主カンボジア政
権（ポル＝ポト政権）が樹立する。この間、大量虐殺が実行される。
- 1979年 ベトナム軍の支援で救国民族統一戦線がプノンペンを侵略し、カンプチア人民共和国
（ヘン＝サムリン政権）を樹立する。
- 1982年 ロン＝ノルのクーデターで追放されていた元国家元首シアヌー クらが民主カンボ
ジア連合政府を樹立し、内戦が激化する。
- 1989年 ベトナム軍が完全撤退する。
- 1993年 王政が復活し、現在まで続くカンボジア王国が誕生する。

【参考】二宮書店編集部 （2016）「カンボジア王国」

『データブック・オブ・ザ・ワールド 2016年度版』pp.186~188、二宮書店。

PART 2 トラム・

クラー小学校

【小学校の基礎情報】

名称：トラム・クラー小学校

生徒：166人 ※2018年12月データより

校長：ネアン・ネン先生

教員：6名 パアンダ・リタ先生、スアン・ポパー先生、ネアン・ソペア先生、

ウウン・チャンニー先生、ヘイアング・セエン・ハアン先生

主要科目：国語、算数、理科、社会、体育（簡易的なもの）、英語（4～6年生）

（午前と午後の2部制）

管轄：カンボジア政府

トラム・クラ

ー小学校全校運動会

【担当】安部、田村、渡部、高木、山口

【目的】

- * Plas+のメンバーと子どもたち、現地の方々との親睦を深める。
- * 勝敗をつけることにより、喜びや悔しさ、仲間と協力することの大切さを体験する機会を共有する。
- * ルールを定め、それを守ることで安全に、公平に、楽しく競技できることを伝える。
- * 子どもたちにとって、最高に楽しい時間をプレゼントする。

【チーム構成】

できる限り力のバランスを平等にするために各学年を均等に分ける。

トラム・クラー小全校生徒合計：166人

青チーム：佐藤(透)・田村・後藤

緑チーム：小川・山口

白チーム：小田嶋・渡部・阿部

オレンジチーム：谷内・丸山

黄チーム：岩上・入江

ピンクチーム：高橋・鈴木・高木

赤チーム：安部・川畑

紫チーム：現地スタッフ・先生方

【競技の流れ】

①準備体操

②玉入れ

【全体ルール】

・勝敗を公平に決めるため、総監督兼審判はカウンターパートであるソパートさん(補助：運動会係)

・得点は、ホワイトボードで開示し、入った個数が多いチームが勝利。

【必要なもの】

- ・ゼッケン(カラーフェルト、安全ピン、黒マーカーペン)
- ・チームコルクボード(コルクボード、色画用紙)
- ・ホワイトボード
- ・カゴ(球を入れる用)
- ・玉(新聞紙・カラーテープ)

【運動会内容】

①準備体操(担当：安部)

例年同様、日本でも行われている準備体操(屈伸や伸脚など)を、クメール語で、「モイ、ピー、バイ！」(1,2,3!)と、子どもたちと声を合わせて行った。担当者の安部が前に立ち、子どもたちに真似してもらいながら準備体操をした。

②玉入れ(担当：田村)

(1)チーム対抗で実施。

(2)1 試合、30 秒で終了。

(3)カゴを持つ人の周りに丸く縄を置き、その外から球を投げ入れ、入った数が1 番多いチームの勝利。

(4)競技者以外のチームは応援に励む。

【運動会を振り返って】

トラム・クラーク小学校は卒業生が訪れて以来3年ぶりの訪問だった為、私たちにとっては初めての経験となった。前回訪れた時の写真や情報を元に何の競技ができるかを考え、玉入れを実施することに決めた。しかし、玉入れ用のカゴはどうするのか、玉は作るのか、購入するのかなどの課題があり、試行錯誤しながら作り上げた競技だった。

結果的にカゴは現地購入、玉は日本で新聞紙とカラーテープを使い作ることに決まった。

当日、玉入れは大盛況だった。子どもたちはそれぞれ自分のところに予め玉を集めておくなど個々で工夫をしており、玉入れに全力で臨んでくれた。また、玉入れには Plas+ のメンバーや先生方にも参加してもらったが、大人の方が本気になってしまい、玉を一気に投げるなど、子どもたちと同じくらい一生懸命に参加してくれるといった意外な一面も見られ、楽しい運動会となった。

結果発表の際には、勝ったチームは手を上げて喜び、負けてしまったチームは表情にも出てしまうくらい悔しがっていて、喜びや悔しさを学んでもらうという目的がしっかり果たせたと感じた。

初めて実施した玉入れだったが、子どもたちが自分たちで工夫をしながらとても楽しんでくれたので実施してよかったと感じた。しかし、円が小さすぎることで球が入りすぎてしまい、時間のロスに繋がるなどの反省点も挙がった。今回は3校全てで運動会を実施することもあり、トラム・クラーク小学校での反省を次の小学校で活かせるように振り返りをしっかり行えたことは良かったと思う。今回も子どもたちの弾けるような笑顔を見ることができてとても幸せだった。子どもたちの思い出に残るような運動会になっていたら嬉しい。

理科実験に関する出前授業

【担当】小田嶋、岩上、佐藤（透）、後藤

【全体目的】

子ども達が肌に触れて実験を行うことで、より深い理解ができる授業行う。

身近なものに対する好奇心を養い、学びに対する楽しさを知ってもらう。

【授業の流れ】

- ①静電気に関する実験
- ②色の混色反応の実験
- ③シャボン玉実験（液体の混ぜる割合で起こる液体の粘度の変化）
- ④実験の振り返り

【準備した実験道具】

- ①静電気に関する実験

塩化ビニルパイプ（4本）、電気クラゲ（スズラントープを割いたもの）、キッチンペーパー（8枚）、画用紙（3枚、静電気の仕組みをイラストにしたもの）

- ②色の混色実験

プラスチックコップ（60個）、大きめのプラスチックコップ（6個）（色水〈赤、青、黄〉の3色をそれぞれ2L、〈緑、白〉の2色をそれぞれ1Lずつ用意）、割りばし（8箸、混ぜるときに使用）、画用紙（7枚、色の混色の仕組みを図式化したもの）、

- ③シャボン玉実験（液体の混ぜる割合で起こる液体の粘度の変化）

シャボン液（500ml）、水（250ml）、ガムシロップ（5個程度）

【授業内容】（司会進行：小田嶋）

- (1)静電気の実験（担当：佐藤・後藤）

目的

- ・摩擦運動により静電気生まれることを理解してもらう。
- ・子ども達に静電気の働きを体験的に感じてもらう。

① アイスブレイク

子ども達の身の回りにあるテレビや携帯電話は何で動いているかについて簡単なクイズを行った。子ども達からは、積極的に回答する姿勢が見られて、スムーズに授業を開始することができた。そして、摩擦運動を行うと電気が溜まることをイラストで説明した。

②理科実験「電気クラゲを浮かせよう」

塩化ビニルパイプ、電気クラゲをキッチンペーパーで擦り帯電させる様子を見せた。クラゲを浮かせ、電気の働きを見て実感してもらえた。

③静電気を子ども達に体験してもらう

帯電させた塩化ビニルパイプを子ども達の髪の毛に当てて、静電気を肌で感じてもらえた。

(2)色の混色反応の実験（担当：小田嶋・岩上）

目的

- ・子ども達に色の変化を実際に行い理解してもらう。
- ・子ども達の独創性・創造性を養う。

①アイスブレイク

色の混色を図式化したもので、混色反応のクイズを出題した。子ども達の中から、代表者1名を出して、実際に混色する様子を周りの子ども達に見せた。子ども達は、意欲的に参加する姿が見えつつも、答えの色（薄緑などの表現が難しい色など）を何色と言葉で言うのか戸惑っている姿も見られた。

② 理科実験「色の変化～色を作ってみよう～」

子ども達を8人程度のグループに分けて、Plas+のメンバーが各グループ1人付き、より近くで混色反応を見られるようにした。また、子ども達を中心となって、色を混ぜる作業を行ったため、参加型の授業にすることができた。そして、子ども達が誤飲しないようにも心掛けた。

③ 自分だけのお気に入りの色を作る

5色の水から、好きな色同士を混ぜて、どんな色になるのか実験した。

(3)シャボン玉実験（液体の混ぜる割合で起こる液体の粘度の変化）（担当：後藤）

目的

- ・シャボン玉の材料から仕組みを知ってもらう。
- ・正しいシャボン玉の吹き方を理解してもらう。

①理科実験

シャボン玉の液体の材料を説明しつつ、大きなシャボン玉を作るには適切な割合にすることが大切であることも説明した。

②実際に子ども達自身でシャボン玉を作ってみる

シャボン液の入ったコップを持った Plas+のメンバーが子ども達のストローにシャボン液をつけて、シャボン玉を作った。この時も、子ども達がシャボン液を誤飲しないように心掛けた。

(4)授業の振り返り

3つの験について、子ども達がしっかり理解しているか確認した。身の回りにあるものに対する興味をもって学びにすることの大切さを伝えた。

【理科実験に関する出前授業を振り返って】

渡航前に、想定していた人数よりも子ども達の人数が多かった。その為、変更点があり共有事項が増えてしまったが Plas+のメンバーの臨機応変な行動もあり、比較的スムーズに実験を進めることができた。一方で、Plas+のメンバー内での共有伝達が上手くいかず、混色の仕方を間違えてしまったことや若干色水の混色反応の実験の色水のセット数が不足していたという反省点が残った。

静電気の実験では、仕組みをイラストで見せたが、隅の席に座っている子ども達への配慮が足りずイラストが見えない子ども達がいた。そして、電気クラゲは、天候に左右されやすいという難点があったが、見事に空中に浮かせることができ、子ども達の反応も好評であった。

色の混色実験では、子ども達が興味を示し、席から立ちあがるほど反応がとても良かった。しかし、アイスブレイクのクイズに時間がかかり、最後のお気に入りの色を作る作業まで出来なかったことが挙げられた。

シャボン玉の実験では、液体の割合が適切ではなかったために、大きなシャボン玉を作ることが難しかった。日本から持参した、大きなシャボン玉を作れる道具もシャボン液の量が足りず、作ることができなかった。

子ども達の様子としては、混色反応の実験やシャボン玉の実験の時は興味津々で楽しそうに実験に参加していた。また、静電気の実験では真剣な眼差しで静電気の仕組みを理解しようとする姿勢も見られた。

今回の出前授業は、今までのものよりも参加型の授業になっていて、子ども達の理解がより深いものになった手ごたえを感じた。このように身の回りにあるものからでも、子ども達に学びを齎すことができる可能性を見出すことができた。

トラム・クラー小学校

交通安全に関する出前授業

【担当】小川、小泉、佐藤(透)、阿部、鈴木

【目的】

- ・交通に対する意識掛け、アームリフレクター⁸の効果について伝える。

⁸ アームリフレクター

夜間の交通安全や防犯に最適な反射板リストバンドである。暗闇では、車やバイクの運転手から歩行者のシルエットは思っているよりも視認しにくい。そのため、私たちは子どもたちを

- ・アームリフレクター着用を習慣づけてもらいたい
- ・子どもたちに交通安全に対する意識を高めてもらいたい

起こりうる交通事故から守るために Plas+オリジナルのアームリフレクターを作成した。

【授業の流れ】

- ①自己紹介
- ②「命を守る幸運のお守り トラム・クラ－ver」上演
- ③アームリフレクターの説明
- ④確認クイズ
- ⑤アームリフレクターの配布

【準備した道具】

劇で使用する背景、クメール語字幕、日本語字幕、小道具、アームリフレクター

【授業内容】

- ①自己紹介(担当：鈴木)

まずは、Plas+メンバーの自己紹介から行った。

司会進行は1年生がクメール語で行い、子ども達にとって親しみやすい導入になった。

- ②「命を守る幸運のお守り トラム・クラ－ver」上映(担当：小川、佐藤)

昨年度、トム・オー小学校で行った劇をトラム・クラ－小学校用に改善したものを上演した。劇中ではアームリフレクターの使い方や効果を解説し、交通安全の大切さを訴えた。

昨年度と同様、劇中の登場人物のセリフは、Plas+メンバーがクメール語で話し、子ども達の興味を引き印象に残る劇を意識して行った。

役を演じたメンバーは2回目という事もあり、劇の流れもスムーズに行えた。またクメール語のセリフと字幕の両方を用いる事で子ども達にとって分かりやすい劇が行えた。

・物語の概要

主人公の名前はソク、飲食店を切り盛りする両親のもとで育ち毎日お店を手伝っている。ある日、ソクは夜道を歩いていると、酔っばらいが運転するバイクと衝突事故を起こしてしまう。幸い大事には至らなかったが、足をケガしてうずくまるソク。すると、突然、可愛らしい少年ソンハー君がやってきて「はずしちゃダメだよ」とソクの腕にアームリフレクターをつける。そして、これが命を守る幸運のお守りであることを伝える。

③アームリフレクターの説明(担当：阿部)

アームリフレクターが日本で使われている交通安全グッズである事を説明し、またアームリフレクターの着装を習慣付けてもらうためにアームリフレクターの仕組み、着ける事での効果を復習した。

昨年度はアームリフレクター配布後、子ども達同士が叩いて遊んでしまい、怪我をする危険性があった。今回はこの反省点をふまえて、人を叩いてはいけない事を注意した。

④確認クイズ(担当：阿部、鈴木)

昨年度の反省点として、「子ども達の理解度を確認出来なかった」点が挙げられた。

今回は、改善策として確認クイズを行った。クイズの内容は①アームリフレクターの効果を伝えるものと②アームリフレクターで人を叩いてはいけない事を伝えるものの2つを出題した。

クイズの出題も1年生がクメール語で行った。またクイズ内容を伝えるイラストも事前に用意し、子ども達に出題内容が正確に伝わる事を意識して行った。クイズを行うことによって劇や私たちが伝えたい内容を子どもたちが理解している事を確認出来た。

また私たちのクメール語で足りない部分は通訳の方に補足してもらう事で子ども達の理解を補った。

⑤アームリフレクターの配布

最後に使用上の注意を確認して、アームリフレクターを配布した。クイズで確認した効果もあり、叩いて遊んでいる生徒は昨年度より少ない印象を受けた。

【出前授業を振り返って】

今回の出前授業は昨年度行った劇の改善版という事もあり、授業全体の流れをスムーズに行うことが出来た。登場人物のセリフも昨年度よりも流暢になり、子ども達の笑顔も増えていて理解度が高まっている事を確認出来た。また、自分たちで行える劇のレパートリーを増やすことで、フィリピンでの活動などで拠点地が増えた場合も授業を行えることは大きな収穫だと思う。

また今回は1年生が確認クイズの提案やクメール語での司会にチャレンジする等、積極的に劇の改善に携わってくれた。クメール語での司会は簡単な事ではないが、練習を重ね自分たちの言葉で子ども達に伝える事に重きを置きチャレンジした。私たちのクメール語が完璧に伝わったとは思わないが、1年生のこの姿勢はしっかりと子ども達に伝わったと思う。

トラム・クラーク小学校で劇の改善版を行った理由はトラム・クラーク小学校はトム・オー小学校よりも都心部近くに位置していて、より自動車等との接触事故を未然に防ぐアームリフレクターの効果がある発揮されると考えたからだ。

私たちはこの授業が子ども達の交通安全意識を少しでも高め、安全に生活を送れることを願っている。



PART 3 ベンロヴ
ィア・レー小学校

【小学校の基礎情報】

名称：ベン・ロヴィア・レー小学校

生徒：127人 ※2018年12月データより

校長：チェアツ・ソケアン先生

教員：3名 ウム・ソヴァンニー先生、ケット・ソピア先生

主要科目：国語、算数、理科、社会、体育、英語（4～6年生）

（午前と午後の2部制）

管轄：カンボジア政府

ベン・ロヴィア・レー小学校

全体運動会

【担当】 安部、田村、渡部、高木、山口

【目的】

トラム・クラ小(P)と同様

【チーム構成】

できる限り力のバランスを平等にするために各学年を均等に分ける。

ベン・ロヴィア・レー小全校生徒合計：127人

青チーム：田村・佐藤(透)・後藤

緑チーム：小川・山口・猪野

白チーム：小田嶋・阿部

オレンジチーム：谷内・渡部

黄チーム：岩上・入江

ピンクチーム：高橋・高木・鈴木

赤チーム：安部・川畑・佐藤(楓)

紫チーム：現地スタッフ

【競技の流れ】

- ① 準備体操
- ② 借りびと競争

【全体ルール】

トラムクラ小と同様

【必要な道具】

- ・ゼッケン(カラーフェルト、安全ピン、黒マーカーペン)
- ・チームコルクボード(コルクボード、色画用紙)

・スケッチブック(画用紙、黒マーカーペン)

【運動会内容】

① 準備体操(担当：田村)

例年同様、日本でも行われている準備運動(屈伸や伸脚など)を、クメール語で、「モイ、ピー、バイ」(1,2,3!)と、子どもたちと声を合わせて行った。担当者の田村が前に立ち、子どもたちに真似してもらいながら行った。

② 借りびと競争(担当：山口)

- 1.あらかじめスケッチブックに Plas+メンバーの名前を記入し用意する。
- 2.各チーム大きい子と小さい子の2人組のペアを作る。
- 3.初めに競技者には借りびとのお題を内緒にして見せないよう、競技者以外の生徒(待っている生徒)にお題を見せ、全員把握してもらう。
- 4.全員把握後、合図と同時に競技者が「お題を確認したら探しに行く。
- 5.スケッチブックに書かれてある Plas+メンバーを見つけたチームは、お題となっていた Plas+メンバーを連れてゴールの場所へ行き、ゴールとなる。
- 6.得点制はなし。

【運動会を振り返って】

今回の運動会では、借りびと競争を行った。借りびと競争は子どもたちもとても楽しそうだった。前日のルール変更や、当日に実施競技を減らすなどの急な変更もあったが、私たち Plas+メンバーは臨機応変に対応出来た。しかし、子どもたちへ理解してもらうために行った競技自体の説明の難しさや事前の流れや場所の確認不足からスムーズに競技を行うことができなかった。

この借りびと競争は Plas+メンバーのうち1人が学校内のどこかに隠れ、子どもたちが探しに行くという競技だったが、子どもたちもとても楽しそうに探していた事が印象的である。運動会係以外の Plas+メンバーもサポートをし、子どもたちがどこにお題となっている人が隠れているのか分からない時に、ヒントを与えたり、子どもたちの誘導を行い、より楽しく、安全に競技を行えた。しかし、隠れに行こうとしてるメンバーを子どもたち

が見てしまい、どこに隠れているのかすぐに分かってしまった事が反省点である。メンバーからの助言もあり、その後は隠れる番ではないメンバーも子どもたちを惑わすために校内を歩き、運動会内で少し改善を行う事ができた。ベン・ロヴィア・レー小の運動会から画用紙にクメール語で"走って"や"並んで"などの呼びかけの言葉を書いて指示を行う際に子どもたちに見せた。それによって子どもたち自身だけで動いてくれたり、小さい子に呼びかけたりしてくれた。今後運動会を行う際はメンバー全員にもこれらの言葉を事前に共有し、覚えることでみんなで子どもたちに呼びかけ合う事ができたらいいと思う。

以前、ベン・ロヴィア・レー小を訪問した際に、体育のフォーマットが欲しいという先生方の要望に応じて、今回私たちは、ドッチボール、大縄跳び、二人三脚の3つの競技をフォーマットとして先生方にお渡しした。次回訪問した際に、これらの競技でベン・ロヴィア・レー小学校に通う子どもたちと遊べたら良いなと思う。

日本文化に関する出前授業

ベン・ロヴィア・レー小学校

【担当】 小田嶋、川畑、高橋、後藤、佐藤

【目的】 *日本の文化を直接、肌で感じることで深い学びをしてもらう

*自分の作ったものに対して、愛着を持つことでものを大切にする心を養う

*自分たちも改めて日本文化を学び、日本とカンボジアの国際交流を図る

【授業の流れ】

- ① うちわの説明、クイズ（どのように使うのか、どのような形があるのか）
- ② 折り紙の説明、人の顔の形を折る作業、自分の顔を描く作業
- ③ 貼り絵の説明、形に沿って貼る作業

【必要な道具】

白いうちわ、黒の折り紙、色折り紙、液体のり、黒ペン、お手本用模造紙

【授業内容】

- ① うちわ（:高橋）

まずは、うちわはどのように使うのか、どのように使うのかをクイズ形式にして問題を出した。そうすると、子どもたちは扇ぐのだと理解していた。

- ② 折り紙について（担当:川畑）

次に、折り紙とはどういうものなのかを説明した。その後、折り紙で人の顔を作ってもらうために担当者が前に立ち、模造紙をお手本にしながら一緒に折った。出来上がった折り紙に自分の似顔絵を描いてもらった。

私たちが想像していたよりも、教えた通りの形に出来上がっていた。また、低学年の子には高学年の子が教える場面も見られた。

1. ③ 貼り絵について (担当:佐藤)

最後に、貼り絵とはどういうものなのかを説明をした。日本の子どもたちが作った四季の貼り絵（桜、紅葉の木）を見せて、日本には四季があるということにも触れた。次に、うちわに元々Plas+メンバーで書いていたハートの形に沿って、その上から貼り絵をしてもらった。

子どもたちは、小さな隙間も埋めるなどとても几帳面な姿が見られた。色んな色の組み合わせで綺麗なものに仕上がっていた。また、先生たちも一緒参加し、子どもたちでなく先生たちとの交流もすることができた。そして、出来上がったうちわをプレゼントした。

【出前授業を振り返って】

今回の目的であった日本の文化を知ってもらうことや、出前授業を通しての交流も出来たのではないかと感じる。また、プレゼントしたうちわを次の日も持ってきているのを見て、愛着を持ってくれたのだと感じた。この心を子供たちには忘れないで欲しい。

子どもたちは折り紙に触れるのが初めてだった為、折り紙を折るのが難しく時間がかかってしまうと予想していたが、Plas+メンバー、先生方のサポートや子どもたち同士で教え合うなどして大幅な時間はかからず成功に終わった。

次回の渡航からも、どのようにしたらよりpresent love ができるかを考えていきたい。

PART 4

トム・オー小学校

【小学校の基礎情報】

名称：公立トム・オー小学校

生徒：179人 ※2017年12月データより

校長：リウ・ティナ先生

教員：6名 ハイ・ロンヴェイ先生、ミアツ・サムポー先生、ティー・ブンチャン先生、

クオン・ティアティー先生、フォウツ・メイングペツ先生

主要科目：国語、算数、理科、社会、体育、英語(4～6年生)

管轄：カンボジア政府

トム・オー小学校全校運動会

【担当】 安部、田村、渡部、高木、山口

【目的】

トラム・クラー、ベン・ロヴィア・レー小学校と同様。※p〇参照

【チーム編成】

トム・オー小学校全校生徒合計:127人

年齢や、力のバランスを平等にするために各学年を均等に分けた。

青チーム：田村・佐藤(透)・後藤

緑チーム：小川・山口・猪野

白チーム：小田嶋・阿部

オレンジチーム：谷内・渡部

黄チーム：岩上・入江

ピンクチーム：高橋・高木・鈴木

赤チーム：安部・川畑・佐藤(楓)

紫チーム：現地スタッフ

【競技の流れ】

①準備体操

②玉入れ

③チーム対抗リレー

【全体ルール】

トラム・クラ、ベン・ロヴィア・レー小学校同様。

【必要な道具】

ゼッケン（カラーフェルト、安全ピン、黒マーカーペン）

チームコルクボード（コルクボード、色画用紙）

スケッチブック（画用紙、黒マーカーペン）

かご（現地で購入したプラスチック製のもの）

玉入れ用の玉（新聞紙、カラーテープ）

得点板（ホワイトボード）

バンダナ

【運動会内容】

①準備体操（担当:田村）

例年同様、日本でも行われている準備運動(屈伸や伸脚など)を、クメール語で、「モイ、ピー、バイ」(1,2,3!)と、子どもたちと声を合わせて行った。担当者の田村が前に立ち、子どもたちに真似してもらいながら行った。

②玉入れ(担当:高木)

(1) 1組ごとに行う。

(2) 地面に描いた円の中心に立っているかごを持った Plas+メンバーに向かって、40 秒間、かごに球を入れ続ける。

- (3) 時間がきたら生徒はその場を離れ、座る。
- (4) かごの中に入った球を、一級ずつ投げ、数をみんなで一緒に数える。
- (5) 数の多かったチームが勝利。
- (6) 得点制はなし。

③チーム対抗リレー(担当:田村)

- (1) 各チーム1名ずつ選出する。
- (2) 所定の場所にペットボトル等を設置し、そこをコーナーとする。
- (3) コーナーを往復し終えた後、次の走者にバトンタッチする。
- (4) 1人ずつ順番に走り、先にアンカーまで走り終えたチームから1位とする。
- (5) 得点制はなし。

【運動会を振り返って】

今回の運動会は、玉入れとチーム対抗リレーを行なった。玉入れは、最初に訪れたトラム・クラーク小学校と同じく大盛況だった。特に一緒に数を数えるときは、自分たちが他のチームに勝てるのかどうかとてもドキドキしながら数えてくれていて、とても盛り上がってくれていた。チーム対抗リレーでは、順番に走るなどのルールを理解できずに勝手に走ってしまう子もいたが、みんなが自分のチームを一生懸命応援しながら楽しく参加してくれていた。最後には時間があまり、Plas+メンバーチーム、カウンターパートの方々とトム・オー小学校の先生方の合同チームで急遽、対抗リレーを行なった。とても盛り上がりはいたが、少し準備などに時間がかかり、子どもたちを待たせてしまった。次回からは、時間が余った時にどうするかを考えておくのもいいかと思う。今回の運動会では全体的に他の学校での改善点を活かし、運動会係以外のメンバーも一緒にサポートをしてくれていたおかげでとてもスムーズに進行することができた。

理科実験に関する出前授業

【担当】小田嶋、岩上、佐藤（透）、後藤

【全体目的】

p（トラム・クラール小学校と同様）に参照

【開催小学校】

トム・オー小学校

【授業の流れ】

p（トラム・クラール小学校と同様）に参照

【準備した実験道具】

①静電気に関する実験

p（トラム・クラール小学校と同様）に参照

②色の混色実験

p（トラム・クラール小学校と同様）に参照

トラム・クラール小学校での反省点を踏まえて、プラスチックコップ18個を追加で購入

③シャボン玉実験（液体の混ぜる割合で起こる液体の粘度の変化）

シャボン液（1L）、水（500mL）、ガムシロップ（10個程度）

【授業内容】

p（トラム・クラール小学校と同様）に参照

【理科実験に関する出前授業を振り返って】

ベンロヴィア・レー小学校での反省点を踏まえて、道具を新たに買い足したことで、授業自体をスムーズに進めることができた。さらに、2回目ということもあり Plas+のメンバーの率先した行動により、子ども達も集中して授業に参加できていた。

静電気の実験では、端に座っている子ども達までイラストを見せることで、情報の伝達が上手に行えていた。また、風が強く吹く中で、電気クラゲが浮く様子を子ども達に見せることができた。

色の混色実験では、クイズをスムーズに行い、自分のお気に入りの色を作る作業まで行えた。また、混ぜた色を発表することで、それぞれの子ども達の個性が出ていて良かった。

シャボン玉の実験では、液体の割合が適切ではなかったため、普通のサイズのシャボン玉を作ることが困難だった。また、日本から持参した大きなシャボン玉も作る道具も、シャボン液の量が足らず、作ることができなかった。

子ども達の様子としては、混色反応の実験やシャボン玉の実験の時は興味津々で楽しそうに実験に参加している姿が見られ、静電気の実験では真面目な様子で静電気の仕組みを理解しようとする姿勢も見られた。

今回の出前授業は、今までの受動的なものではなく、参加型の授業となっており、子ども達の理解がより深いものになった手ごたえを感じた。このような身の回りにあるものからでも、子ども達に学びを齎すことができる可能性を見出すことができた。

トム・オー小学校 交通安全に関する出前授業

【担当】 谷内、岩上、猪野、入江、須藤

【目的】

- *子ども達に楽しく交通安全を学んでもらう
- *塀建設プロジェクトのアフターケアを行なう

* 昨年完成した塀を大切にしてもらおうためのアプローチを行なう

【授業の流れ】

- ① 前回の授業の振り返り
- ② 『命を守る塀をきれいに、大切に』上演
- ③ 今回の授業の振り返り

【準備した道具】

劇で使用する紙芝居、クメール語字幕、日本語字幕、小道具（ボール、塀、アームリフレクターなど）

【授業内容】

- ① 前回の授業の振り返り （担当：谷内）

まずは、前回の授業の振り返りを行なった。昨年主人公を務めた佐藤を例に出し、登場人物とどのような内容だったかを振り返った。また、アームリフレクターの効果を再確認し、夜外に出歩くときは、必ず身に着けることを強調して伝えた。

- ② 『命を守る塀をきれいに、大切に』上演

（担当：佐藤（透）、猪野、入江、佐藤（楓）、鈴木）

『命を守る塀をきれいに、大切に』と題し、昨年プロジェクトで完成した塀を大切に扱ってもらおうための劇を行なった。劇中で、ボールがあたってしまうことで塀が傷んでいることを伝え、大切に扱うことの必要性を訴えた。劇を通して子ども達の印象に残りやすく、楽しく学んでもらえるように心掛けた。

また、前回の授業で行なった劇の続きのストーリーを考え、登場人物の名前や同じ役者を用いた。そうしたことによって、子ども達に親近感を持って最後まで話を聞いてもらうこと

ができた。前回と同様に劇中の登場人物のセリフはクメール語で話し、字幕のクメール語も自分たちで書くことに挑戦した。

物語の概要：

去年の劇で登場した主人公のソクが、ある日の学校で起こった不思議な体験の物語。

ある日、いつものように校庭で友達とサッカーをしていると塀が泣いていることに気づく。そこで、子ども達が塀によじ登ったり、サッカーボールが当たったりすることによって

③ 今回の授業の振り返り （担当：岩上）

劇が終わり、今回の授業の振り返りを子ども達と行なった。日頃から塀は傷んでいることや塀の扱い方を改めて説明し、壊れないように大切に扱ってほしいと強調して伝えた。

【出前授業を振り返って】

今回の出前授業は塀建設プロジェクトのアフターケアとして、塀の扱い方に関する劇を行なった。塀は消耗品のため、いつ壊れてしまうか分からない。そのため、できるだけ正しい扱い方をしてもらうことが、結果的に長い間子ども達の命を守ることができると考え、今回の劇を行なった。また、今回の授業も昨年同様、劇中のセリフはクメール語で行なった。そして、私たちのつたないクメール語では完璧に伝わらない可能性を考慮しクメール語の字幕も用意した。

今回良かった点として、1年生主体で劇を行うことができた点があげられた。活力に溢れている1年生の全力で行なった演技が、昨年以上にたくさんの笑顔とリアクションを引き出すことができた。他にも、日ごろの何気ない行動で塀が傷んでしまうことを伝えることができた。そして子ども達を守る塀を、子ども達自身で大切に扱うことを強調して伝えることができた。そのことが今回劇を行なって一番良かった点だと考える。一方で反省点として、劇で使う言葉を現地でしか習得できない点が課題としてあげられた。そのため、劇で使う言葉を早めにカウンターパートに翻訳してもらい、日本で練習していくなど、現地の負担を少しでも減らせるように早めの行動をしていきたい。

今回で、トム・オー小学校での劇は2回目となり、子ども達からしても Plas+の劇になれてくる頃だと思う。そのため子ども達のことを考え、より楽しく、学んでいける新しい何かを考えていかなければいけないと考える。そしてこれからも、今より具体的に、新しい方法や手段を考えていくことが、結果として子ども達に愛を届けることを改めて実感することができた。

PART 5

シエムリアップ・ プノンペン

【トンレサップ湖】

2月10日曜日昼間。トンレサップ湖を観光。

東南アジア最大の湖ともいわれているトンレサップ湖は、豊富な水と漁業でカンボジアの人々の生活を支えており「カンボジアの心臓」と呼ばれている。メンバー全員を乗せることのできる

大きなボートに乗ると、私たちと同じ年くらいの男の子がボートを出発させた。そこに見えてきたのが、アンコール時代から続いているといわれている水上生活だ。五千世帯もの人々が暮らしている。ガイドさんがそこには、水上学校、水上市場、水上警察官もいるのだということを教えてくれた。衝撃を受けたことは、食器を洗う水、洗濯をする水、生活に使う水はその湖から使っているということだ。湖の水は茶色く濁っていて、生活で使うと聞くと驚くようなものだった。間近に水上生活の様子を見ることができ、とても良い経験をする事が出来た。



【アンコール

ワット】

2月16日土

曜日の夕方にカ

ンボジア北西部のシェムリアップ州に位置する世界文化遺産、アンコールワットを訪れた。

ここではガイドさんの案内を受けながら観光をした。わたしたち Plas+はこの地が非常に重要な意味を持つ場所である事を理解していたので、真剣にガイドさんの話に耳を傾けていた。ここでの観光は歴史を学ぶ面においても有意義であった。

アンコールワット寺院の中には仏教の僧侶がお経を唱えている姿が見え、ヒンドゥー教の壁画を拝見する事もできた。この壁画にはヒンドゥー教の神話が描かれていた。宗教が1つの地に混同している姿は日本の神社やお寺の仏教だけの場では味わえない空気を感じることができ、新鮮であった。寺院の中には銃弾の後も残されていた。これはカンボジア内戦時にできた傷であり、壁の窪んだ部分に触れてみるとつるつるとしていて掌程の大きさであった。ここで争いが起きたことを強く感じさせられた。

アンコールワットを訪れ、私達はまた少しカンボジアを知れた。宗教や歴史がこの地に本当に存在していたことを自分達の間で確かめられた。アンコールワット観光は私達に様々な知識、経験を与え、非常に有意義な時間であった。

【トゥールスレン博



ールス
物館】

2月18

日月曜

日。トゥールスレン博物館を訪れた。トゥールスレンはカンボジアの悲惨な歴史の1つで、多くの無実の人々を監禁、拷問する政治犯収容所として使われていた。この場所で2年9ヶ月の間に約20,000人もの人が命を失った。トゥールスレン内部に入ると、収容されていた人々の顔写真、残酷な拷問を描いた絵や使われていた拷問器具などが展示されていた。実際には、ムチ打ちや電気ショックを与えられるなど想像絶す

る拷問がされていた。目に入るもの全てが生々しく、犠牲者の人々がどのような生活

をし、どのような思いで生活していたのかと思うと、とても胸が苦しくなり、こんな

恐ろしいこと

前に起こって

とに驚き、衝

た。現実社

のような悲惨

ったという事

な歴史が2度

ないことを祈る。



が僅か40年

いたというこ

撃を受け

会で実際にこ

なことが起こ

実。同じよう

と繰り返され

【キリングフィールド】

2月18日月曜日午後、キリングフィールドを訪れた。

キリングフィールドとは、約300万人が虐殺された場所であり、今回訪れたのは300以上あるというキリングフィールドの1つで、約2万人が殺された場所だ。まさに殺すためだけに存在する場所

ルスレン(○ページ参
てこられた人々が、強
れた後、ここで殺され
ると、まず慰霊碑が目
園のような雰囲気
た場所だとは思えな
し、日本語の音声ガイ
ラ敷地内を見て回っ
んだんとこの場所の
解することができた。
人々が埋められてい



あり、トゥー
照)から連れ
制労働させら
た。敷地に入
に入った。公
虐殺が行われ
かった。しか
ドを聞きなが
ていると、だ
恐ろしさを理
敷地内には、
た穴跡、殺害

するために使われた道具、この場所から発見された犠牲者の衣服、赤ん坊が打ちつけられ殺されたキリングツリーなど当時のものが多く残されていた。大きな建物である慰霊碑の中には、ここで亡くなった人々の遺骨が建物の上部まで保管されている。音声ガイドでは、当時の詳しい状況や生存者の言葉を聞くことができた。想像を絶する出来事が約30年前にあったことが信じられなかった。最も強く印象に残ったのは、音声ガイドの終盤にあった、処刑時の音をかき消すために流されていた音楽だ。虐殺とは対照的な明るい音楽だった。亡くなった人々が最期に耳にしたのはこの音楽だったのだろう。音声ガイドの最後では「この負の歴史を次の世代に伝えていくことが、ここを訪れた者の使命だ」と言っており、カンボジアで活動していく上で、この場所を訪れたことは、重要なことであると感じた。

【くっくま孤児院】

2月18日 月曜日。くっくま孤児院を訪問。くっくま孤児院の正式名称は CCMHA 孤児院 (Cambodia's Children Make the heaven Association) という。以前までは CLCA 孤児院という名前だったが 2010 年 CLCA 孤児院を MAKE THE HEAVEN(GLOBE JUNGLE の前身)の孤児院として、日本からの支援を受けての運営が決まった。2011 年に現在のくっくま孤児院という名前で運営していくことになった。

私たちはくっくま孤児院に到着すると、子どもたちは日本語で自分の名前や将来の夢を教えてくれた。私たちが自分たちの自己紹介を一通り自己紹介が終わると、今度は子どもたちからカンボジアの伝統的なダンスを披露してくれた。そのダンスのお返しとして私たちも日本語の歌を歌った。

その後、子どもたちとサッカーや折り紙などを通じての交流を行った。くっくま孤児院にはけん玉やオセロ、人工芝といった子どもたちが遊ぶにはとてもいい環境が整っていた。

交流をしている時の子どもたちの顔はキラキラと輝いていて、子どもたちの過去を感じさせないものだった。

今回くっくま孤児院を訪問させてもらい私たちは日本でなかなか見聞きすることのできないことを感じる事ができた。

孤児院という特殊な環境で生活をしていても自分の夢をしっかりともっていて頑張っていた。そんな子どもたちから私たちは自発的に頑張るなど、学ぶべきことがあると同時に私たちが忘れかけている私たちがどれだけ恵まれているかということを考えさせられた。

また次回の渡航で機会があれば是非もう一度訪れたい場所だ。その時には子どもたちの成長した姿を見るだけでなく、私たち自身の子どもたちに負けないうらい夢に向かって頑張っている姿を見せる必要があると思う。

PART 6

個人感想

谷内うらら

国際交流・国際協力専攻 3年



初めてが詰まったカンボジア渡航

【はじめに】

今回渡航で個人的にはカンボジアへ訪れるのは 4 回目となった。何度も足を運んできた国とはいえ、19 人という過去最大の人数で渡航を行うこと、最高学年として大切な後輩たちとカンボジアへ行くことに正直楽しみな気持ちと不安な気持ちがあった。また、昨年まで拠点先として活動を行っていたトム・オー小学校に加え、新たに二校の小学校を訪問し、先生方や村の方々は私たちのことを受け入れてくれるのだろうか。子どもたちはどんな表情を見せてくれるのだろうか。そんな複雑な感情を胸に大好きな国カンボジアへ渡った。

【活動】

今回の出前授業や活動は Plas+として新しい挑戦が詰まった活動となった。訪問先の小学校が増えたことに加え、1・2 年生から上がった新しい出前授業の実施をした。また、以前に小学校からニーズとして挙げた授業への取り組みなど Plas+として初めてやるが多かった。これまでの経験を生かすことやこの渡航内で改善点を生かすことができたのはとても大きな成果

ではないかと感じている。Plas+の人数が多いからこそ子どもたちへのサポートが充実したことや、多くの子どもたちを授業へ巻き込めたのは良かった点だと感じている。前年まで活動を行っていたトム・オー小学校に加え ترام・クラール小学校、ベン・ロヴィア・レー小学校と新しい学校での活動を通し小学校ごとの特徴や子どもたちの様子などそれぞれの特徴をとらえられた。それにより今後行う授業にも新しい可能性や多様性が期待できると個人的に感じた活動であった。Plas+の公式渡航とは別に訪れたことのあるベン・ロヴィア・レー小学校、 ترام・クラール小学校とのつながりを作れたことは本当にうれしいことだと感じている。

この繋がりによって一人でも多くのカンボジアの子どもたちへ PresentLove をすることができた、本当にその喜びがあふれる渡航となった。今回、多くの小学校を訪問することや様々な授業を行うことで子どもたちの性格によって伝え方の工夫や巻き込み方など考えることができた。こうした経験を今後の渡航、また国内・フィリピンでの活動にも生かせと感じた。

【最後に】

今回一度の渡航で三校の小学校を訪問できたことで先生方との話し合いを行い、出前授業や交流を通じてそれぞれの小学校の特徴や現状を目にすることができた。今回の経験から何がより子どもたちの笑顔につながるのか、Plas+として何が学生らしい国際協力とは何か今一度向き合いプロジェクト立ち上げや今後の活動につなげていきたい。



できるのか、
エクト立ち上

安部和佳奈

“私にとって”のカンボジア

【はじめに】

去年の2月のカンボジア渡航以来、久しぶりのカンボジア渡航。今回の渡航は、最高学年としていく初めてのカンボジア渡航でもあった。久しぶりのカンボジアにワクワクしながらも、後輩15名をしっかりと見ていかなくてはいけない緊張感や責任感を感じていた。活動場所であるトム・オー小学校だけでなく、今回からトラム・クラール小学校やベン・ロヴィア・レー小学校での活動もあり、たくさんのカンボジアの子どもたちに会えて、Present love できることがとても楽しみであった。

【活動と学び】

今回の3校での活動を通して、出前授業や運動会を行って子どもたちが喜んでくれたことや活動の中身がすごく充実したものになったことがいい収穫だと感じている。3校それぞれ、印象に残っていることがある。トラム・クラール小学校では、小学校からホテルまでの田んぼ道でバンの中から子どもたちだけでなく村人たちに挨拶をしたことだ。「ソクサバーイ！」や「リアハイ！」など声をかけ、手を振っていた。すると手を振り返してくれる。この何気ないことが私にとって心は繋がっていると感じた。次にベン・ロヴィア・レー小学校では、スレイナーという女の子と仲良くなったことだ。日本文化の出前授業の時にずっと授業の様子を見ていたため、教室の外にあった台で村に住んでいるお母さんたちや小学校を卒業した女の子たちと、一緒にうちわ作りをした。その時に仲良くなり、小学校近くの水がすごく透き通っていてきれいなところなどを案内してくれた。それだけではなく運動会で暑い時には飲み物をくれたり、アイスをくれたりなど私にとってすごく温かくて、私はスレイナーに何ができるだろうと思った。最後はトム・オー小学校。今回の渡航で訪れるのが5度目となる小学校であり、1年生の頃から活動していて見てきた子どもたちの成長を見られることがすごく嬉しく思う。あんなに仲良く一緒にいた男の子が思春期を迎えて一緒にいてくれなくなったことやPlas+のアイドル的存在の男の子が卒業をしてしまうことはとても悲しく感じる。しかし、もう中学生になった女の子が今でも小学校に来てくれて出前授業や運動会で交流できることが本当に大切な宝物だと私は思う。日本という約4200キロも離れたところから私たちPlas+が来ることを楽しみ

でいてくれることが、私たちにとってもう Plas+とトム・オー小学校の Present love の完成形ができていないのではないかと考えている。

【最後に】

このような素敵な関係がトム・オー小学校だけではなく、トラム・クラーク小学校やベン・ロヴィア・レー小学校でも築けていけるだろう。また、カンボジア・フィリピン・日本の Plas+ と関わるすべての人が Plas+のことを考えるだけでワクワクしてもらえるように残りの活動を全力でしていきたい。そして卒業まで数回しか行けないカンボジアに、私だからできる“Present love”をしていく！

小川龍星

国際交流・国際協力専攻 3年

カンボジア渡航を振り返って



【はじめに】

私にとって3度目となる今回の渡航は Plas+として、学生として最後の渡航であった。これまでの3年間、カンボジア、フィリピン、日本を舞台に国際協力に向き合い、様々な活動に取り組んできた。Plas+は私にとって学びの原点であり、自分自身の在り方について考える場であり、考え学んだことを仲間に共有して挑戦できる大切な居場所であった。この渡航は最上級生として、次を繋いでいく後輩に「カンボジアを好きになってもらいたい」、「Plas+として自分自身の軸を見つけて欲しい」といった思いをテーマにしていた。

【カンボジアにまた来たい】

私たち先輩にとって最も大事なことの1つは、後輩（特に1年生）にカンボジアを好きになってもらい、「また来たい」と思える国にできるかどうかである。今回の渡航では、初めて最上級生として計画から実施までを中心的に進めてきた。1年生だったころは見るもの全てが新鮮で、好奇心を煽られることが沢山あり、先輩たちに一生懸命に着いていくことで精一杯だった。しかし、渡航経験を重ねるごとに真新しさを感じる回数は徐々に減り、自分の中で周りを見ることができるよう余裕が生まれてきた。この渡航では、後輩の思いや考えに常に気を配り、アンテナを張っていたので、Plas+内外で起こる物事に対して自分事として捉えることができた。その結果、私自身も今まで以上に多くの学びの機会に触れることができ、それを共有できたのではないかと思う。

【自分自身の軸とは】

「他人のためが自分のため」が私のあらゆる行動の根源であり、曲げない信念である。Plas+の活動に対して一生懸命に取り組んできたからこそ、相手を思う大切さや繋がり的重要性を人一倍に痛感して理解した。そして、相手を思って寄り添うことが私にとっての幸せであり、軸であることに気が付いた。集団に属していると個としての在り方を表現するのが難しいと感じる。特に、強い何かを持った者にとっては居心地が悪いとさえ感じることもある。そんな時こそ、他責にせず、自責で活動に参加するように心掛けるといい。つまり、Plas+での活動を自分事として捉え、他人事にしない工夫をすると自らの信念や軸に妥協することなく大切な居場所であることを実感できる。カンボジア渡航で沢山の学びを得て、各々が自分自身を振り返り、これからのことを少しずつ考え始めていると思う。悩みや不安と向き合った時、辛いと感じることが多いかもしれないが、1人ではない。同じように苦悩し、葛藤している仲間がすぐ近くにいることを忘れないで欲しい。

【最後に】

Plas+として仲間と一緒に歩んできた経験は、私自身の価値観に最も大きな変化を与え、自己形成の核となる部分となっている。Plas+での学びは皆が主体となって形作っていきける。価値があるものになるかは自分たち次第である。だからこそ、日々のミーティングや皆と過ごす日々を大切に、取り組んでいきたい。

小田嶋優花

国際交流・国際協力専攻3年



今回の渡航を終えて

【はじめに】

今回私にとって4回目になる渡航は上級生としてとても責任のある少し不安な渡航でもあり、新たな後輩たちを迎えワクワクするような渡航でもあった。私の今回の渡航の目標が『1年生がカンボジアを好きになってもう一度来たいと思ってくれる渡航にすること』だった。そして、約2週間の渡航で印象に残っていることが2点ある。①一般財団法人麗澤海外開発協会 RODA が建設に携わった小学校3校（トラム・クラール小学校、ベン・ロヴィア・レー小学校、トム・オー小学校）に行けたこと。②初めてカンボジアを訪れた後輩達について。この2点について話を進めていこうと思う。

【①一般財団法人麗澤海外開発協会 RODA が小学校建設に携わった3校を訪問して】

4回目になるカンボジア渡航で私は初めてトラム・クラール小学校、ベン・ロヴィア・レー小学校を訪れた。この2校は私が兼ねてから行きたいと思っていた小学校だったので夢をかなえる

ことができた。3校の小学校を訪れた分とてもハードスケジュールな二週間だったが、様々な出前授業ができて充実した渡航でもあった。そして面白いことに3校ともそれぞれ違った学校の色があり子どもたちの特徴にも違いがあった。

トラム・クラーク小学校の子どもたちは、初めて会ったメンバーにも飛びついてくれてとても人懐っこい子が多かった。そして、女の先生もいるからか教室も装飾されていてとても華やかな雰囲気だった。

ベン・ロヴィア・レー小学校の子どもたちは、とても大人しくてシャイな子が多いが高学年の子が低学年の子供たちをしっかりサポートしてくれるしっかり者が多く優しい子ばかりだった。

トム・オー小学校の子たちはパワフルな子がとても多く、何度も会っている子は名前を覚えてくれて温かく迎えている。そして、何度もあっている子は名前も覚えてくれるので「また来たい！」と思わせてくれる私の原点だ。

3校ともそれぞれの個性があり、沢山の子どもたちの笑顔が見ることができた今回の渡航は私にとって大切な思い出でもあり貴重な体験ができた。もし、来年も行くことができれば3校の子どもたちに会いたい。

【②初めてカンボジアを訪れた後輩たちについて】

今回4人の上級生に対して、14名という大人数の後輩を連れてカンボジアで先輩方がいない初渡航でもあり、カンボジアに初めて行く1年生が「もう一度行きたい」と思ってくれるのかと言う少し不安な渡航だった。渡航前でのミーティングではカンボジアのイメージができず、発言できない子たちが渡航中と後は自分たちがやりたいこと・改善点を発言してくれたことは彼らが成長したということだと感じた。子どもたちと楽しそうに交流している彼らを見て私も安心した。渡航中の恒例のおなかを痛める子やけがをする子はいたもの「もう一度カンボジアに行きたい」と言ってくれたことがとても嬉しかった。これからも子どもたち Present Love をして笑顔の連鎖を作っていってほしい。

【最後に】

この自主企画ゼミナールは3年間で終わってしまうが、私はこれからも大好きなカンボジアを訪れたいし、アジア圏を好きになったきっかけを与えてくれた恩返しをしていきたいです。子どもたちの笑顔は私の元気の源です。

今回の渡航を機に Plas+を引き継いでくれる後輩たちの時代が始まります。新生 Plas+期待しててください！そして、これからも Plas+の活動を温かく見守っていただけたら幸いです。

岩上 颯太

国際交流・国際協力専攻 2年



Plas+での在り方

【はじめに】

今回の渡航を通して、改めて自分のことを考えさせられる渡航になった。3年生4人、その他下級生が15人の渡航であり、明らかに上級生が少ない現状であった。私たち2年生は今回が2回目のカンボジア渡航である。そんな私達が後輩ができた中で先輩として活動できていたのか、3年生の負担を減らせるような活躍ができていたのか、改めて考えさせられることがある。今回はそれら私たちのあり方について焦点を当てて書いていこうと思う。

【活動と学び】

今回渡航を思い返してみると、私たちは先輩方に頼りきっていたのではないだろうか。先輩方の偉大さに甘え、どこか他人事のように考えていたのかもしれない。先輩方の大変さを私たちはまだ知ることはできない。後輩のことを気にかけるとか、きっとそういうレ

ベルではなく、それ以上の責任を背負っていると感じる。これは一部だとは思いますが、Plas+の最高学年としての責任。年に1回の渡航で、現地のカウンターパートや先生方との関係を作りあげていかなければいけないという責任。これ以上にもっとたくさんの責任があると思う。これからは代替わりを迎え私たちが団体の中心となる。それに伴ってたくさんのプレッシャーを感じてはいるものの、きっとこれは最上級生にならないとわからないのだと思う。今までのように好き勝手に行動しても良かったときとは違い、やるべきことが増え、様々な行動に責任を伴う。

私はメンバーの内の一人の先輩からお話しを聞くことができた。その先輩曰く、3年生4人の中でも役割があると言う。団体を締める役、後輩とコミュニケーションをとる役のようなものだ。そのお話しを聞いたときに、私は改めて同期内の役割、人間性について考えてみた。そして自分自身のことを深く考えてみた。このメンバーの中で、自分にしかないものを見つけ、他の人にはできないものを考え、この団体に自分の価値、立ち位置、何かプラスになるものを見出さなければいけないと感じた。

【最後に】

今回の渡航は、私にとっても、メンバーにとっても、Plas+としても今後の活動につながる大事な渡航になったのではないだろうか。Plas+はまだ発足から5年と、今も成長し続けている団体である。その中で、完璧に正解に導ける人なんて誰もいない。Plas+での自分の価値、役割を各々が考え、メンバー全員で良い方向へ導けるような団体にしていかなければいけないと感じた。また、今回の渡航で改めて自分自身のことを考える機会を得ることができた。そして、全体的にとっても充実した渡航を行うことができたと考える。

そして今回もたくさんの人のおかげで、渡航を無事に終えることができた。関わってくださった全ての方々、本当にありがとうございました。

川畑 美由紀

国際交流・国際協力専攻 2年



二回目のカンボジア渡航を経て

【はじめに】

初めての渡航から一年が経ち、遂に二回目のカンボジア渡航に行くことができた。二年生になり、後輩を連れて渡航に行くことで、まるで去年とは違う渡航になった。上に立つ人としての振る舞い、周りに配慮する心など、当たり前だけれど大切なことに多々気付かされる渡航となった。

一年ぶりに見るカンボジアは少し変化がありつつも、懐かしいと思えた。まるでもう一つの故郷を訪れるようだった。それでは今回の渡航を振り返っていこうと思う。

【活動・学び】

今回の渡航で前回と比べて一番の違いは、訪れる小学校の個数だと私は思う。去年はトム・オー小学校だけに訪問したが、今年はベン・ロヴィア・レー小学校と、トラム・クラ小学校をあわせて、3校に訪れることができた。これは Plas+としても大きな一歩であり、私にも大きな衝撃を与えることとなった。

初めて訪問するベン・ロヴィア・レー小学校とトラム・クラ小学校では、子どもたちとの間に些細な距離感を感じた。私も子どもたちも初対面であり、接し方が分からなかったからだ。不思議と、それは嫌な感情ではなかった。私は初めて会う子どもたちと絆を深めていく

ことに、心を躍らせていたのだ。これは私だけでは Plas+の皆がそう感じていたと思う。不器用であった心が伝わるように努力していきたくと思った。

去年も訪れたトム・オー小学校では、子どもたち熱い歓迎を受けた。嬉しそうに駆け寄ってきて、「私覚えてる？」と、口々に言う子どもたちの姿が微笑った。私の腕を引っ張り、彼方此方に連れて行って飾られている表彰書や、校庭に植えてある植物をきた。言葉はよく分からなくても、キラキラとしたに話しかける子どもたちが愛らしくてたまらなかった。その時、Plas+が来るのが彼らにとっては楽しい年間行事みたいになっているのではないかと思った。そうだとすれば、私も少しは“Present Love”が出来ていたということだ。特別なことはしてあげられないが、大人になっても記憶に残るような、楽しい体験を沢山、一緒にしていきたいと心から思った。



なく、
ても、真
からの
の名前
ましか
は、教室
見せて
目で私

【最後に】

“Present Love”は Plas+のモットーであり、私たちの存在意義とも言える部分だ。去年は先輩たちに着いていくことで精一杯で、そこまで思いが及ばなかった。しかし、今回の渡航で自分のすべきこと、したいことが見えたような気がした。私が Plas+にいる理由、カンボジアに行く理由、“Present Love”をする理由を見つけたのだ。

今回の渡航は私の心に強く残ることになるだろう。嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、全てが私を成長させる大切な経験だった。今の気持ちと子どもたちの笑顔を忘れずに、これからも Plas+の活動に邁進していこうと思う。

佐藤透

国際交流・国際協力専攻2年

カンボジア渡航を終えて

【はじめに】

Plas+に所属して2年、東南アジアへの渡航は今回で4回目になる。周りからは「飽きないの?」と言われる事がしばしばだが、不思議なことに全く飽きない。それどころかPlas+メンバーのおかげで毎回新しい発見や笑いがたくさんある。私がPlas+の活動において大切にしている事は「まず自分たち自身が楽しむこと」だ。今回の渡航に限らず、そんな楽しさを経験させてくれたメンバーの皆に感謝したい。

【活動・学び】

今年度から私は2年生になり、出前授業を1つ任されるようになった。去年行った交通安全の劇の改善版を1年生の2人と一緒に作っていく事が僕の役割だった。

授業準備は順調に進んでいったが、しかし本当に1年生はこの授業を良いと思っているのか、1年生の意見を授業に組み込まれているかと不安になり、僕は授業に何か物足りなさを感じていた。

そんな思いが募っていた本番前日、1年生の2人から「司会をクメール語で行いたい」と申し出を受けた。その言葉を聞いた時、積極的に関わろうとしてくれる姿勢がとても嬉しかったが、それと同時に少し驚いた。クメール語の発音は日本人にとって簡単ではなく、台本があったとしても正しく発音するのは至難の業だろうと思った。また、クメール語を1日で練習するのならば、相当の覚悟が必要だ。しかし、2人はすごく楽しそうにクメール語を練習していて、今までで一番生き生きとしているように見えた。

そして本番当日、2人のクメール語はしっかり子ども達に届いていた。2人は自分たちの言葉で伝えようと必死に話し、子ども達は2人の言葉を聞き逃さないように耳を傾けていた。発音が少し違ったのだろうか、子ども達から笑いが起こる、だけど話している当の本人達も笑顔だった。学校全体が笑顔で溢れていたその瞬間を今でも私ははっきり覚えている。

【最後に】

2年生になり、もう先輩の背中を追いかけるだけでは不十分、1年生に背中を見せなければならぬ。そんなことを考え過ぎたこの渡航、見せるどころか後輩の背中を見る機会も多かった。私が思っていた以上に1年生は頼もしく成長していたのだと思う。

私はこの春から留学する。大学生活においてとても大きな存在だった Plas+ から離れる事は寂しく不安でもあるけれど、同期や後輩たちによって Plas+ の活動がどう進んでいくのか1年後が楽しみでもある。

新体制になり、これから大変な事もたくさんあると思う。そんな中でも皆が楽しいと思える事を皆のペースで頑張ってもらいたい。そして来年もカンボジアの子ども達に笑顔を届けてほしいと私は願っている。

最後になりましたが、Plas+の活動に関わり、支えてくださった方々に感謝いたします。皆様のおかげで今回も無事渡航を終える事が出来ました。本当にありがとうございました。

高橋くるみ

国際交流・国際協力専攻二年

題名



【はじめに】

2年になった私にとって今回のカンボジア渡航は2回目ものとなった。二度目の景色、人との再会、小学校での活動、懐かしく喜ばしい気持ちと、1年経った自分の中の変化を強く感じた渡航だった。

【2つ気付き】

今回の渡航で私が感じた気付き二つある。1つ目に、村の小学校では英語の学習にあまり力を入れていないということだ。私は将来、中学校の英語教師になりたいと考えているため、カンボジアの英語教育にも興味を持っている。村の小学校で力を入れている教科や人気のある授業を聞くと、国語（カンボジア語）と数学という答えが多かった。首都であるプノンペンや、外国人観光客の多いシェムリアップではよく耳にする英語だが、村に来ると一切耳にしないという現状があった。そんな現状を知り、私たち Plas+ にできる事はないかと考えていた渡航だった。

もう1つ気付きがある。私たちは今回、訪問した3校の全ての小学校で運動会を行った。その中の1校ヴェンロヴィアレー小学校が、競技を行うためのフォーマットを作ってほしいと頼んでくれたことである。2回渡航をし、毎回運動会を行っていたが今までそんなことをしたことがなかった。しかし今回のことから何か気付かされたものがあった。勝ち負けという悔しさや嬉しさを味わい、楽しい時間を共有することはもちろん、私たちはそれを文字化して残して帰るということができる。せっかく現地で子ども達と楽しい時間を一緒に共有することができるのなら、それを残していく方法を考えることが大切で、やっていかないといけない事のように感じた。残す事で人から人に続いていけば、present love は続きもっと大きなものになれる気がする。

【最後に】

2回目、1年越しにカンボジアを訪れて、変わらない楽しさ喜びもあれば、1年生の時には味わわなかった思いや、心の変化を感じた。私はその変化を忘れず、感じたものを発信しつつ、メンバーみんなとの協調生を大切に、今後も何らかの形で Present love を続けていきたい。

田村 遥花

新しい挑戦

【はじめに】

今回2度目となったカンボジア渡航。去年までのただ先輩について

いくのとは違う、先輩としての責任感も感じながらの渡航となった。

また、今回はたくさん新しい挑戦をした渡航だったと思う。これから

その挑戦を振り返っていこうと思う。

【活動と学び】

今回は2週間で ترام・クラー小学校、ベンロ・ヴィア・レー小学校、トム・オー小学校

の3校を訪れた。去年はトム・オー小学校のみであったため、3校で行うというのは1つ目

の新しい挑戦だった。2月のカンボジアは乾季のため、気温がすごく高く、自分を含めメン

バーの体調面に不安があった。実際その予想は的中し、小学校での活動期間中は体調を崩す

メンバーも少なくなかった。しかし、3校を訪れたことでそれぞれの小学校を比較すること

が出来たのは今後の活動において大きな収穫だったと思う。

小学校の活動で1番印象に残っているのはベンロ・ヴィア・レー小学校で行った先生たち

とのミーティング中のことだ。この小学校は以前 Plas+の卒業生が訪れて以来、2度目の訪

問であったにも関わらず Plas+が来てくれるのをずっと待っていたと先生は仰ってくれた。

小学校での活動中も子どもたちだけでなく、先生方も積極的に参加してくれたり、サポート

してくれたり、先輩たちや私たちの思いが先生方にちゃんと伝わっていたことに感銘を受けた。

今回の渡航では、日本文化の授業としてうちわ作りや化学の授業などの新たな活動も行った。特にうちわ作りは、今回ベンロ・ヴィア・レー小学校のみの活動だったが、今後は他の小学校でも実施したいと思える程、いい授業が出来たと思う。子どもたちは私たちよりも手先が器用で、個性のある素敵のうちわがたくさん出来上がった。また自分たちで作ったということもあり、次の日の運動会にまでうちわを持ってきてくれるなど大切にしてくれている

姿を見ることができてとても嬉しかったのを覚えている。しかし、うちわの授業をするにはコストがかかる為、そこをどうしていくかが今後の課題として挙げた。

【最後に】

今回小学校での活動が半分を占めていた渡航だったため、一緒に活動してくれる現地の方々には去年に引き続き、たくさんのサポートをしてもらった。彼らがいなかったら今回の渡航の成功はなかっただろう。彼らや学校の先生方、子どもたちに感謝の気持ちでいっぱいだ。また、今回の渡航で1校1校しっかり振り返りをし、改善を重ねながら活動に臨めたこと

はPlas+の大きな成長に繋がったと思う。1年生も初めてのカンボジア渡航に関わらず、2週間の中でぐんぐん成長していく姿を見て、いつの間にこんなにたくましくなっていたのだ

ろうと驚きが隠せなかった。これから私たちの学年がPlas+を引っ張っていくことになるが

、頼もしい後輩と共に新しいことにたくさん挑戦しつつ、今後もPlas+として精一杯

present love していきたいと思う。

丸山海結

国際交流・国際協力専攻2年



特別なカンボジア渡航

【はじめに】

私は今回2019年2月5日から10日までの6日間カンボジアへ渡航した。去年の渡航は初めてだったこともあり、カンボジアで見るもの全てが新鮮で今までにない経験をたくさんした。また、塀建設もあり先輩方からたくさんのことを教えていただき、ついて行くことにも必死だった。今回の渡航は私にとってまた別の意味で特別になった。なぜなら、私自身台湾に留学中であったため、その中の長期休みを利用してカンボジア渡航をした。少ない渡航日数ではあったが、振り返ってみようと思う。

【活動と学び】

今回、私は素敵な経験をさせてくれたカンボジアに行きとにかく愛を届けたいと思い今回の渡航を決めた。私はこの半年間 Plas の活動に携われなかったこともあり、渡航準備もできず、出前授業の詳細も渡航する4日前に聞いた。しっかりと活動していけるか不安になった時もあったが、何かしら Plas として活動できたらと思い覚悟を決め、渡航をした。活動できなかった半年間があり、後輩との距離も感じていた。今回、初めて後輩と渡航をするということで、距離を縮めることも目標であった。カンボジアに着き、初めてのカンボジアで目をキラキラさせている後輩の姿を見て、まるで1年前の自分のようで懐かしかった。そして、後輩も少しずつ打ち解けられていったことはとても嬉しかった。

今回、私は ترامクラー学校に二日間訪れた。1日目は運動会を行なった。運動会では競技をいくつか用意をしていたが、時間の関係で玉入れだけの実施となった。玉入れはシンプルなルールだったこともあり、とてもみんな楽しんでた。2日目は出前授業で科学と Plas オリジナルアームリフレクターの使い方に関する交通安全の劇を行なった。 ترامクラー小学校の子どもたちもみんな楽しみながら、劇を真剣に聞いていた。Plas メンバーも去年と同様、クメール語で行なった。去年と同じ劇を行なったことから、前回よりスムーズに行なえたことはとてもよかった。他にも子どもたちと交流をし、一番に子どもたちがとても楽しんでいる姿や笑顔を見て今回カンボジアに渡航してよかったと思った。

【最後に】

今回の渡航では、去年の渡航よりも少し余裕が生まれ、様々なことに目を向けられるようになったように感じた。なので、今後はそれぞれの小学校で出前授業だけではなく、ニーズ調査も細かく行い、今後も私たちの“学生だからこそできること”と相手のニーズが合うような活動に重点を置き、“Present love”していきたいと考えた。

渡部 陸

国際協力・国際交流専攻2年

2度目のカンボジア渡航



【はじめに】

今回の渡航は2度目のカンボジアであったため、楽しみよりも不安や緊張が大きかった昨年の渡航に比べ、子どもたちと交流することができる嬉しさが大きかった。

そして今年も、昨年も訪れた小学校に加え、前回の渡航で訪れていない2校の小学校に訪れ、より多くの子どもたちと触れ合うことができた。これから、子どもが好きな私にとって充実したカンボジア渡航を振り返っていく。

【小学校での活動】

今回の渡航では、今までも訪れていたトム・オー小学校に加え、トラム・クラ小、ベン・ロヴィア・レー小学校にも訪れ、3校で別の出前授業や運動会を行った。

トラム・クラ小では、交通事故防止の劇、科学の授業や玉入れを行ったが、どの出前授業も真剣に聞いてくれており十分に理解してくれたと感じる。また、初めての試みであった科学の授業と玉入れは子どもたちにも参加してもらったため、盛り上がりを見せた。

ベン・ロヴィア・レー小では、日本文化を伝える出前授業としてオリジナルのうちわ作りと借り人競争を行った。借り人競争では予定通りにいかない部分もあったがメンバー間でのアドバイスもあり無事に成功させることができた。また、うちわ作りは授業を行った次の日にもうちわを持ってくるなど、自分が作ったうちわに思い入れがあるように感じた。

トム・オー小では、昨年に建設した塀を大切に使うための劇と科学の出前授業、玉入れとリレーを行った。劇に関してはメンバーがクメール語で行い、子どもたちがクメール語のセリフを理解してくれたことが大きな収穫であったと感じる。科学の授業も、トラム・クラ小で行った際の反省点を活かし成功させることができた。運動会は空いた時間を使い、子どもたちだけでなく先生や現地の大人の方とも一緒に行ったことで時間をより有意義に使うことができたと感じる。

今回の渡航は、子どもたち、先生方、現地の大人の方の楽しそうな顔や、私たちが来ることに関してどう思っているか、という質問に対する、「実は君たちが来てくれるのをずっと待っていた。」というお言葉に、Plas+の存在意義や交流を継続する大切さを改めて感じることもできた渡航であった。

【最後に】

今振り返ってみると現地での日々は、子どもたちに愛を届けようと一生懸命活動したが、私が子どもたちをはじめとする多くのカンボジア人の方に、愛や笑顔をもらっており、様々な方に支えられていることを再認識することができた。

私たちは今後もカンボジアを訪れ、モットーである present love に向けて精進しますのでこれからも温かく見守っていただけると幸いです。

阿部 明香里

国際交流・国際協力専攻1年

はじめてのカンボジア



【はじめに】

小さいころから憧れていたカンボジア。高校時代、そのカンボジアで活動している Plas+ を知り、わたしは麗澤大学を選んだ。待ちに待ったカンボジア渡航。期待と不安と期待を胸にカンボジアへと向かった。カンボジアは、私がイメージしていたより活気にあふれていた。カンボジア人は心が広く、優しく、そしてとても人間くさかった。そんなカンボジアが大好きになった2週間の渡航だった。

【活動・学び】

今回の渡航ではトラム・クラーク小学校、ベン・ロヴィア・レー小学校、トム・オー小学校の3校の小学校に訪れた。この3校での活動は、私が今後も Plas+の一員として活動していく上で、重要な変化と気づきを与えてくれた。わたしは Plas+に所属しながらも、子どもが苦手だった。子どもは好きなのだが、接し方が分からなかったのだ。そのため子どもと接するとき、癒される気持ちと同時にストレスも感じていたのが正直なところだ。Plas+のメンバーとして、このことがずっと悩みの種であった。しかし、3校での活動を終えて、子どもたちと接することにストレスを感じなくなった。むしろ、もっと一緒にいたいと思うようになったのだ。この変化は私にとって重要な変化であり、その変化を嬉しく思う。カンボジアの子どもたちが私に自信を与えてくれたのだと感じる。それだけではない。3校での活動を通して、私が Plas+で頑張っていきたいことに気づくことができた。それは、授業に参加しない子のケアである。どの小学校にも、何らかの理由で授業に参加しない子どもがいる。その子どもたちを無理に授業に参加させたいわけではない。何もせず放っておくのではなく違うかたちでの present love をしていきたいと思った。Plas+のモットーは「すべての子どもたちに愛を」だ。授業に参加しない子にも愛を届けることを、わたしは頑張っていこうと心に決めた。実際、授業に参加していない子どもたちに接触すると、はじめは何を聞いても無反応だが、あきらめず話しかけると徐々に心を開いてくれ、最後には、授業に参加してくれたり、手を繋いで一緒に帰ってくれたりした。やりがいを感じたし、自分のやってることには意味があると思った。そのため3校での活動は、私にとって、重要なものとなった。

今回、小学校での活動以外にも、カンボジアの文化や歴史を知ることにも目的の1つであった。わたしが最も印象的だったのはカンボジアの負の歴史である。トゥールスレンとキリングフィールドを訪れ、詳しくその当時の状況と様子を知った。あまりに悲惨な出来事に言葉がでなかった。カンボジアで活動する人間として、この場所を訪れ、負の歴史を学んだことは重要であると感じた。

【おわりに】

Plas+メンバーと2週間カンボジアで生活し、3年生の偉大さ、2年生の頼もしさ、同期の居心地の良さを感じた渡航となった。全員が無事に渡航を終えられたのは、3年生の先輩の力が大きかったように思える。感謝の気持ちでいっぱいだ。また Plas+を支えてくれたカンボジア人のチーム Plas+にもとても感謝している。出会ったカンボジア人全員に感謝だ。たくさんの人

に支えられ、充実の2週間を過ごすことができた。おかげで、カンボジアが大好きになった。憧れのカンボジアは、予想を大幅に上回るほど素敵な国だった。今回カンボジアで得たものを、自分の糧に、また Plas+の糧にして今後も活動していきたい。

猪野 遥人

国際交流・国際協力専攻 一年



カンボジアを訪れて

【はじめに】

私が国際協力団体 Plas+に所属してから約1年が経った。そんな中でのカンボジア初渡航には様々な思いがあった。約1年間カンボジアの話先輩方から聞き、想像が膨らんでいた。

加えてカンボジアの知識も増えていき、カンボジアへ行きたいと思う事が度々あった。カンボジアに行き何が出来るのだろうかかと悩む事もあった。様々な感情を持ちカンボジア渡航に臨んだ。子ども達が笑顔で運動会や劇などを見てくれ、Plas+のモットーである「すべての子ども達に愛を」が達成出来たと感じた。その瞬間、渡航前の不安は無くなっていた。「私達は子ども達を笑顔にする事ができたのだ。」そう思うととても嬉しかった。この貴重な体験をさせてくれたカンボジア、カウンターパトの皆さんそして Plas+のみんなに感謝したい。

【活動・学び】

東南アジアに位置するカンボジアへの渡航は初めてだった。当然ではあるが環境も違い、言葉も違った。その中で最も感動した事は小学校に訪問した際の劇で見た光景だ。カンボジアの子ども達は私達が交通安全についての劇をしている時や塀を大切に扱ってほしいと伝える劇をしている時もしっかりと劇を見ていた。寝ている子はおらず、私達の拙いクメール語を真剣に聞いてくれていた。その光景に私は心を打たれた。そして、子ども達に何かを伝える事をこの先も継続できれば良いと思った。

【最後に】

カンボジアに渡航して、普段気づかない事が沢山あると気づかされた。特に周りの人の存在に感謝出来た事は人間として少し成長出来た部分だ。私はカンボジアのカウンターパートの方々無くしては今回の渡航は実現出来なかったと思っている。また Plas+の先輩方、同期がいなければやはり今回の渡航は無事に終えられなかったとも思っている。さらに言えば、Plas+が発足していなければ私はカンボジアに行くことすらなかったであろう。そのように考えていくと今までに出会った尊敬できる人や友達そして家族に感謝が止まらなくなった。今回のカンボジア渡航は普段の生活の中で考えもしていなかった感謝という当たり前で大切なことに、カンボジアの方々の温かさを持って教えて頂いた気がした。私にとってカンボジアは大切な事を気づかせてくれる大切な国になった。カンボジアにたいし対して力になれることがあるのなら、これからも自身の持っている経験や知識を振り絞り協力したいと改めて思った。

入江翔大

国際交流・国際協力専攻1年



題名

[はじめに]

カンボジアに行ってみたい気持ちはあったが、私には関係のない国だろうと思っていた。しかし、この渡航で私の心を大きく動かす国になるとは想像もしていなかった。

[学び]

私はカンボジアから沢山の学びをもらった。このことだけは胸を張ることができる。今回、私は三校の小学校とくっくま孤児院を訪れた。小学校によって生徒の色は違ったが共通して言えることは、子どもたちが純粋で私たちが行う出前授業に興味を持って聞いてくれたということだ。私たちはクメール語を使っての説明を試みたが、正直なところ伝わっていたかと言われれば否である。しかし、子供たちは一生懸命に理解をしようと聞いてくれたことは事実だ。私は出前授業の結果としての成功、失敗よりも出前授業のプロセスで好奇心を持って子どもたちが自主的に考えてくれることの方が重要だと思う。私たちが行った出前授業に対するカンボジアの子どもたちの好奇心、姿勢は、私たちが子どもたちを見習うべきところだった。そして、初めて言語の壁にぶつかったが、言葉は通じなくても笑顔は通じることに気づけた瞬間でもあった。

次に、私がくっくま孤児院を訪れた際に感じた学びについて振り返ろうと思う。くっくま孤児院では特別な事情を持った子どもたちがたくさん生活している。くっくま孤児院では今回の渡航で自分と近い年齢の子どもたちと交流をする機会となりその際に、伝統的なダンスを披露してもらったりサッカーをしたりした。ここでも子どもたちは家族と離れて暮らしているのにも関わらず笑顔絶やることがなかった。くっくま孤児院を訪れて最初に子どもたちはみんな自分の将来の夢を持っていた。特別な過去を持ちながらも自分の夢を実現するために頑張っていた。孤児院を訪れる前まで私は可哀想だな、という気持ちが少なからずあった。しかし、そのような思いに至ることが失礼だと気付いた。子どもたちは私よりも遥かに頑張っていて自分の未熟さを感じることができる良い機会となった。

[最後に]

“言葉は通じないが笑顔は通じる”と前述したが、実際のところ子どもたちと自分の言葉でコミュニケーションを取れなかったことが今回の渡航で一番大きい後悔だ。しかし、この渡航で感じた学びは、私が忘れていたことを思い出させてくれた貴重な時間となった。

次回の渡航には、カンボジアの子どもたちと学び学ばれの関係を作るためにクメール語を習得して臨もうと思った。

後藤 亮一

経済学部・経済学科

グローバル人材育成専攻1年



カンボジアで学んだ「思いやり」

【はじめに】

大学に入学してから2度目の海外渡航。フィリピン渡航での経験や知識を活かしてカンボジアでは様々なことに挑戦しようと思った。例えば、出前授業の静電気を始めとする理科の実験は、出来るだけ多くの子ども達が肌で感じられるように参加型の授業作りを心掛けた。これは、フィリピン渡航で感じたクラスの中で参加できない子ども達をできるだけ減らしたいという私の目標からきている。その際に、私のやってみたいことに協力して頂いた先輩方には感謝してもしきれない。こうして私のやりたいことは少しずつ現実化していった。しかし、21人もの大きな団体になると、仕事の分担などでの悩みはあった。皆が割り振られた担当を同じペースで進めていくことの難しさを痛感した。しかし、悩んでいる私に気がついて手を差し伸べてくれた先輩もいた。責任感が強く自分で始めたことは最後までやり遂げたいと考えていた私に、仲間と協力することの大切さを教えてくれたことに感謝している。様々な感情が入り混じって、カンボジア渡航を迎えた。

【活動・学び】

同じく今回は2週間にわたる長い渡航で、特に小学校訪問が始まる前の深夜のミーティングは Plas+ が大きな団体として動いていくには、メンバーの意識が変わったターニングポイントであった。1人1人のメンバーの持っている考え方が違うことで、少しずつ不満や疑問が募っていた。そんな中で、その気付きから、Plas+がより強く団結していくには、「思いやり」が大切ではないかと感じた。当たり前のように感じる「思いやり」がメンバーが増え、普段とは異なる環境では出来ていないと自分自身が一番思ったからだった。それから、私は出来るだけ多くのメンバー、チーム Plas+（現地のカウンターパートやドライバー、以後チーム Plas+と表記）と積極的にコミュニケーションを取るようにした。改めて思ったことは、一人一人個性は違うけれどもとても面白い人達が集まった団体だということだった。こうして、小学校訪問の日々が始まった。

同じく小学校訪問では、出前授業の理科実験は初めての取り組みであり、不安なこともあったが若干の反省点はあったが大成功だった。私が目標にしていた全員の子ども達笑顔で実験に参加する様子が見られた。特に、自分で好きな色を作り発表する混色実験が子ども達に好評だった。今回の理科の実験は、どの出前授業よりも共有事項が多く、Plas+メンバー全員の協力がなければ出来なかったことだった。私はこの時に Plas+の活動をより拡大していく可能性が見い出せた。渡航前に感じていたこの人数だからこそ難しいことよりも、この人数だからこそ強みになり出来ることの多さも実感することができた。そして、チーム Plas+にも感謝したい。彼らのおかげで、言語の壁のある子ども達との交流ができ、スムーズに授業が行えたからだ。彼らとの交流の日々で言語に対する興味・関心が沸いた。彼らとは、英語で会話をしていたが自らの英語力の無さも痛感することにもなったが、新たにクメール語を話せるようになりたいという目標もできた。

【最後に】

今回の渡航では、カンボジアの人々の温かさに触れるとともに、私たち自身が忘れかけていた「思いやり」に気づかされる渡航となった。沢山の笑顔を届けるとともに、私たちを笑顔にしてくれたカンボジアの人々に、私自身何かできないかプロジェクトとして活動していきたい。

佐藤 楓

初めての感情

【はじめに】

私にとってこの渡航は初めてのカンボジアであった。また初めての海外でもあった。日数で考えると長いと感じる2週間の渡航で不安もたくさんあったが、ワクワクした気持ちの方が大きかった。Plas+に所属して早10ヶ月。ただただ先輩達に付いて行くことしかできなかった私でもこの渡航で少しは自分で何かをすることは出来たのではないかと思う。そして、自分が想像していたカンボジアとは違ってたくさんカンボジアのことを知ることができた。

【活動・学び】

今回、活動の拠点として行った小学校が3つある。始めに行ったのがトラム・クラ小学校でどんな子ども達がいるのか楽しみであった。バスから降りると、子ども達が駆け寄ってきて最初はとても驚いた。初対面で国も違うのに、こんなにも笑顔で手を引いてくれる子ども達に感動した。この時からカンボジア人の親しみやすさと優しさを感じた。そしてこの時のことは今でも鮮明に覚えていて印象的だった。活動として、3つの小学校では運動会と出前授業を行った。出前授業では科学、日本文化、交通安全についての授業をした。2つ目に行ったベン・ロヴィア・レー小学校では日本文化の授業をした。そして、私は日本文化の授業の担当で子ども達の前に立ち貼り絵について説明した。子ども達は真剣に話を聞いて、貼り絵を小さな隙間も埋めるくらい几帳面に仕上げられてカンボジア人の新しい一面も見ることができた。

最後に行ったのがトム・オー小学校。ここでは、前回の渡航で行った交通安全の出前授業の劇の続きを行った。そこに私も出演した。そしたら、子ども達は私の役名で私を覚えてくれていて、ちゃんと劇を見てくれていたんだととても嬉しく思った。

それぞれの小学校で抱いた感情は、とても不思議な感情で今までにない感情だった。どの小学校も振り返ってみると本当に印象的で自分が活動をちゃんと出来たと実感することができた。

また、カンボジアの歴史を知ることが目的にトンレサップ湖、アンコールワット、トゥールスレン博物館にも訪れた。そこでは、聞いていた話や写真で見ていたのと想像とは違くども圧倒された。自分の目で見ることによって色んなカンボジアを知ることができた2週間であった。

【終わりに】

長いと感じていた2週間も、その日が来ると本当の間だった。知らない人も挨拶したり手を振ると返り、言語が通じなくてもジェスチャーなどで伝えられる子ども達、たくさんの優しさに触れて私もたPlas+のモットーであるpresent loveをしていきたくことができたとても濃い2週間であった。そしてアで抱いた感情は絶対忘れたくないと思える素敵



にあっという
してくれた
ようとしてく
くさんの
いと心から思
て、カンボジ
なものになっ

鈴木 駿

国際交流・国際協力専攻1年

発見

【はじめに】

私は今回の渡航で初めてカンボジアを訪れた。この Plas+に入っていなければ、人生でカンボジアを訪れることはなかったかもしれない。まず、カンボジアという素晴らしい国に行く機会を与えてくれた Plas+に感謝したい。カンボジアでのたくさんの出会い、多くの発見と学びが私を成長させ、新たな価値観を生み出すことができた。

【活動・学び】

言語が通用しない国で人とどのようにコミュニケーション取ればよいか、渡航前からこれだけを考えていた。不安というよりは楽しみ、期待のほうが大きかった。だが、実際は自分の言いたいことが言葉にできないという苦しさが増してストレスになってしまっていた。身振りや手振りだけでは伝えにくいことが非常に多く、自分のコミュニケーション能力に限界を感じた。今まで経験することができなかった言語の壁に直面し、私にとって新しい体験となった。この経験で改めて言語を学ぶことの大切さを知り、より一層、語学習得のために語学の勉強に力を入れるようになった。

今回の渡航のメインである、小学校での出前授業ではたくさんの発見をすることができた。違う色同士を混ぜて新たな色をつくるという授業では、子どもたちがすごく驚き、関心を持っていたことに自分が驚いた。自分が今まで当たり前だと思っていたことは子どもたちにとっては当たり前ではなかったのだ。例えば赤と青を混ぜると紫になることは当然のことだと思っていた。しかし、子どもたちは初めてその光景を目にしたようで、新たな発見となっていた。このように学生である私にも子どもたちに何かを考えるきっかけを与えたり、何かを発見する機会を作り出すことができるということを Plas+の出前授業を通して気付いた。モノよりもまずは機会の提供をするということをも自分の価値観として大事にしていきたいと思う。

【最後に】

言語が通用しないことや体調管理不足による猛烈な腹痛など多少辛いこともあったが、そんな辛いことよりももちろん楽しいことのほうが断然多かった。まず、何よりも人の暖かさと心の広さがカンボジアの特長であり、どこへ行っても心温まるような体験ができ良い思い出になった。また多くの発見や気づきがあり、とても実りの深い2週間になった。常に笑っていたカンボジアでの2週間は Plas+メンバーのおかげだった。本当にありがとう！

高木 智稀

国際交流・国際協力専攻1年



カンボジア渡航を経て

【はじめに】

私は今回のカンボジア渡航で初めてカンボジアを訪れた。Plas+に入って先輩方のお話や、イメージしていたことでしかカンボジアを知らず、知識はほとんど無の状態での渡航だった。しかし、自分の思っていたイメージとはかけ離れており、建設ビルが立ち並び活気溢れる発展途中の街並みや車通りの多さにとても驚いた。この2週間でカンボジアの様々なことを知ることができた。そして、Plas+内で自分のすべきことを考えることや周りの仲間と協力し合う大切さを学ぶことができた。

【活動・学び】

今回の渡航は、2週間という長い期間でトラム・クラ小、ベン・ロヴィア・レー小、トム・オー小の3つの小学校を訪問した。今回私は、Plas+の運動会係としてこの3校での運動会を運営することとなった。渡航前には色々な道具を準備し、現地では急な競技変更やル

ール変更などが数々あり、今後の活動に活かせる経験をたくさんすることができた。現地の子どもたちはとても楽しんでくれていたため、結果としては大成功に終わった運動会も運動会係以外の Plas+メンバーやカウンターパートの方々の協力がなければ絶対に成功することができなかった。私はこの運動会を通して、個人が今何をすべきなのか、何ができるのかを考えることの大切さを学ぶことができた。

そして今回の渡航で私は、小学校以外にも現地の人と交流ができるナイトマーケットにも訪れた。現地ではカウンターパートの方々や先輩方に教えてもらったクメール語で、あまり日本で経験のできない値段交渉などをしながらたくさんの買い物を楽しんだ。カンボジアではあまり英語が話されていないとは聞いていたが、ナイトマーケットでは意外にも英語を話す人がいたり、中にはつたない日本語まで話してくれる人もいた。しかし、思うように伝えたいことが伝わらなかったことが多かったため、フィリピン渡航の時と同様に自分の語学力の無さを痛感した渡航でもあった。フィリピン渡航後、英語の勉強に力を入れるようになったが、今回の渡航を終えて更に語学の勉強に力を入れるようにしていきたい。

【最後に】

Plas+の一員としての海外渡航が2回目であった今回、現地での体調不良や英語と日本語以外でのコミュニケーションなど、初めての経験がたくさんあった渡航になった。そして、常に笑顔でサポートしてくれた Plas+のメンバーとカウンターパートの方々がいたからこそこのような経験をすることができた。この経験を活かし、全員への恩返しとして Plas+の活動へ還元できるようにしたい。

山口 玖美伽

国際交流・国際協力専攻1年



初めてのカンボジア渡航

【はじめに】

初めて訪れたカンボジア。先輩がいつもカンボジアについて話してくれていたが、全て想像の世界であった。実際カンボジアを訪れると、カンボジアはとても素晴らしい国だと感じた。また首都のプノンペンが私が想像していたよりも発展していてとても驚いた。クメール語が主要言語であるため、言語があまり通じない不安もあったが、カンボジア人の優しさに支えられながら初めての渡航が始まった。

【活動・学び】

私は今回の渡航でたくさんの present love が出来たのではないと思う。1番最初に訪れた ترام・クラ小学校的時は、クメール語もあまり分からず、子どもたちに話しかけられても何も返す事が出来なかったが、最後に訪れたトム・オー小学校的時には自分からクメール語で話しかける事が出来るようになった。そのような意味でも私が1番印象に残っている小学校はトム・オー小学校である。先輩方が毎年活動を行なっている場所であり、昨年塀建設を行なった場所でもあるため1番楽しみにしていた小学校であった。子どもたちは私たちが来た事が分かるとうらやから笑顔で走ってくる。初めてトム・オー小学校を訪れたにも関わらず、私を前から知っているかのように子どもたちが走ってきてとても嬉しかったことを覚えている。トム・オー小学校は先輩方が前から交流をしているため、子どもたちが積極的に私たちに近寄ってくれた印象が強い。 ترام・クラ小学校、ベン・ロヴィア・レー小学校では、男の子が恥ずかしがる様子に受けられた子が多かったが、トム・オー小学校では男の子も積極的に話しかけてくれて嬉しかった。でも、私は3校全てに present love 出来たのではないと思う。子どもたちが笑っている姿、真剣に話を聞いている姿、そんな純粋な子どもたちのために行う活動はとても楽しくて、色んな事を吸収できた。

また、カンボジア人の優しさがとても印象に残っている。日本人とは違った優しさに私は、たくさん助けられた。何をしても怒らず、笑顔で受け入れてくれる優しいカンボジア人が私は大好きである。見ず知らずの私たちが手を振ったら振り返してくれ、そんな些細な事も国を超えて繋がれたような気がしてとても嬉しかった。また、カンボジア人が Hello は日本語で何て言うの？と聞いてくれたり、ありがとうって日本語で言ってくれたり私にとってはとても嬉しいことであった。最終日には本気でもっとカンボジアにいたいなと思った。それくらいたくさんの優しさをもらった。以前は日本の方が裕福に暮らせて幸せだと感じる時もあったけれど、カンボジアに行って、発展途上国のように裕福に暮

らせなくても笑顔が多い人たちに囲まれながら生活できることは私にとって幸せだと感じた。自然と笑顔になれる場所だった。

【最後に】

今回の渡航を終えて、Plas+にはたくさんの繋がりがあるのだと感じた。私たちのために一緒に活動してくれた全ての人に感謝したい。そして、カンボジア渡航を楽しませてくれて、たくさん支えてくれた先輩方、たくさん笑わせてくれた同期の Plas+メンバー全員に1番感謝したい。まだまだ知らないこともたくさんあるし、得ていかなければならないこともたくさんあるけれど、この渡航で学んだこと、感じたことを忘れずにこれからの活動に励みたい。そして、多くの人にカンボジアの良さを知ってもらえるように頑張りたい。

PART 7 おわりに

おわりに

Plas+として8度目の渡航の今回は、19人という史上最高の人数での渡航であり、人数が多い分意見や心境も異なり、衝突やすれ違いの多いカンボジア渡航となりました。1年生にとっては初めてのカンボジア渡航でした。2年生は初めての後輩を連れての渡航であり、3年生は4人で19人の後輩を抱え、メンバーそれぞれが不安と緊張に包まれた渡航だったと思います。

今回の渡航では今までとは違い、トム・オー小学校だけではなく、トラム・クラール小学校とベン・ロヴィア・レー小学校の計3校に訪問しました。『トム・オー小学校における安全な学び場づくりプロジェクト』も一段落つき、トラム・クラール小学校でも交通安全に対する

出前授業を行いました。ベン・ロヴィア・レー小学校では要望があった日本文化の出前授業を行いました。

3校での出前授業は決して容易いことではなかったが、大人数を生かし、一人一人の負担をうまく調節できたのではないかと思います。周囲に手助けを求め、積極的に手伝い、周りの人の有難みを感じた渡航でした。これからも3校とのつながりを深め、更なる支援や愛を届けるよう誠心誠意、努めてまいります。

Plas+の今までの活動やプロジェクトは、ご協力して下さった皆さまがいなければ実現することができなかったと思います。

いつも見守ってくださっている皆さまへ、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。まだまだ至らない点が多い私たちですが、これからもご指導と応援を何卒よろしくお願い致します。

私たち Plas+は、周囲への感謝と、愛をプレゼントする気持ちを忘れず、これからも活動に励んでいきます。